『濁りなき詩』

祝う海

教会のなか赤い花をもった君に
金色の光はふってくる　くもった室内はあかるくてらされて
やさしくほほえむ　まんまるい目にひかる透明な宝石
たいせつにしてきたもの　君という君のみつめたそこにいる君
赤い布の路を歩く背中をおすたくさんの拍手
うれし泣きしているお父さんとお母さん　笑って　笑って　泣いて
もしなんて声から耳にふたをした　手にしたあたたかさは透きとおるこころの水滴
あたなの手をとって　あなたの胸のなかいくつもの将来をみる
決してはなしたりはしない
ちょっとくらい泣いてもいい
きこえる　いつも　いつもきこえていた　この空のむこうにあなたはいて
苦しい日をのりこえてここにくる　きっとここにくるって
埃のふる街　ふりかえりたくなるような路を一生懸命のりこえて
倒れても　もう無理とあきらめかけても　あなたも星をみて泣いているかもしれない
厚くてけり壊そうとしてもひらけない霧の門
君も闘っている　そうかもしれないし
知らない人にやさしく耳をかまれているかもしれない

あなたもそう　辛いことのあった夜　うけとめてもらいたくて携帯を鳴らす
下になった女の子と視線をかさねて　君を守るためにうまれてきた
その子と舌をからめて気もちをたしかめあう

眠りから目をさましたときの不安
空はおかしいくらいあかるくて　太陽は当たり前のようにひかっていて
街は呼吸していた　君は暗いロッカールームのなかキーをまわす

……金子時雨

あなたはクリマスツリーのむこうに季節にあわない海をみていた
一緒にいこう　英雄なんかにはとてもなれない
汽笛は君の声を消した
こつこつとヒールを鳴らした　あなたにむかって
格好つけて煙を吸った　君といる未来から目をそらして
ここから積まれていく今という記憶
あの夜からふりかかる痛みの雨　分針を無理矢理まわしてあなたに吼えた
翡翠色に点滅する蛍の求愛をみていた
月の吐く息に髪をゆらした君は皮膚をむいたように接触をまっていた
頭を肩にのせた君の華奢な肉体をひきよせたとき
波の音をきいた　その音は経験からきこえたものとは異質な
途方もない宇宙のはてにある二人にしか与えられなかった
コマのようにまわりまわる乳白色の海
うけとめるよ　痛みをやさしさにかえたそのほほえみをたやさせないために
うまれてきた　あらゆる試練をのりこえてここにたち祝福をうける

目をつむった奥にサフィアをしきつめたような空と地球を透かしてしまうような海はひらかれた　西風にとける記憶は魚よりもちいさかったころへと退化していく　子守唄のような波に耳をすます　うちよせる波に脈はかさなった
シェルターのような青い海　君と砂浜に白木のチェアをおいてマスカット色のカクテルに頬をそめる　赤と金色の気球のような太陽の光にそまる肉体をからませ想いをわかちあう　熱くなった燐を君のなかにうめた
本当にいいのかな　こんなにも素敵なときのなかにいて
水平線にとけていく金貨をまきちらしたような光をみつめて君はそういった　せつなさはうるむ瞳の奥にすいこまれ安心をあたえられ幸福な気もちからほろほろと泣いてしまう
宵の星をみつめる一頭のイルカをみつけた　はにかみ手をからめる　海面をここちよくはねるイルカのうしろからもう一頭あらわれた　波間に浮いたふたつの月のようにともしあう二頭　視線はその争わない哺乳類のむかう先遠い彼方にいる仲間へとうつっていく

月にひかれて

手は誠　手は瞬間の貯蓄庫
手は己　手とともにある記憶こそ幾千億の理をこえた心をうつす
冬の太陽に胸をはる　ほんとうは今にも肩をおとしてしまいそう
時の経過はいろんな鉄球をおしつけた
成長は求めるものを山のように積み重ね
氾濫した川のようにあきらめを下流へおしやった
あかるいところ　陽のあたる土に足をむける
弱い光もたいせつなあかり　必死に頭を陽のなかにいれてきた
もっとゆっくりと　焦らなくてもいい　母はそういう
母よ　そういうあなたは己の歩いてきた路をふりかえって
そのみちのりを一瞬という
陶器の皿を洗う母の手をみる　冷たくて赤くなった手　とても一瞬とはおもえない
その手には苦しいことや辛いことをのりこえてきた弱さとたくましさ
なにより深い慈しみをたくわえている　子を産む前　父と結婚する前
密かな青春や無垢なころの記憶も秘めている
胸をはりたい　この両手もいろんな経験を蓄えていく
くる日もくる日も空は夕焼け色にそまってしまう　昨日といっしょの色のしない空
大きな変化は大きな不安　空はいいころあいの変化を保つ
その変化に感嘆し妄想狂たちは執着してきた
中庭にいって犬に骨をやり　公園にいって鳩のむれに豆をまく
恐い　ふくらむような夜の足音はなにか人の手をこえた不安を
心の水面下にあるもっとも奥底の地底湖に潜む己のえら呼吸をはやめる
蒸し焼かれるような心音の炎　恐竜も狼も死滅した
腰をふる魔物たち　この冷たくなった身にぬくもりを
ふるえている弱き心をかさねて死の司祭の月の妖力から守ってほしい
月は魂の墓　ここからみる月はいつも美しい

黒い桜

やってきた春の空気は燃えるような魂の火をかき消していく　暮れいく太陽の光は無音の波のように街へとおしよせた　移りいく四季の落し物を拾うようにマイナスな気持ちは破壊される　こころの照明はおちた　残ったのは濃い霧のような闇　頭のなかにあった紐をひいてみる　きこえてくるレクイエム　安らかな音の深海　青い空のむこうに葬られた月にひかれ目をつむる　廃墟となったこころは気泡のようになって痛々しい今を蘇生させた　地表の上にちゃんと立って駅にむかう

ここは選択の許されなかった夕焼けのほとり　さよならをいったのに冬はつめたい空気を残していった　麗しく咲いた桜並木の下　答えを失い灰のように浮遊した桜の花を両手にすくい数枚の白い花にいつかの夢の羽をみた　掌をやさしくつつみこむ乾いた気流　いくら空回りしても足跡はここにある　なにもかもを諦めて終わったように桜をみてほんとうは雪のようなんていいたくない　駅前にあるロータリーの中心に設けられた噴水はきらきらと茜色を反射して透明な洋服をゆらしている　この街のことならみんな知っている床屋の店主は改札を抜けてくる人たちに笑って手をふった

老夫婦は散りいく粉雪のような桜に酔いしれている　視線を高くもっていくと失っていくことの儚さに美しさをもちよりまた来年もと花にかたりかけた　大きな街からみたら黒蟻のようなこの命のまわりにも縁という円はまわっていて支えられている　無気力に足を進めても警報機の鳴る踏み切りを前にしても在るということはちいさくない

「信仰という炎のむなしさをしった」

桜をみつめて君はそういう　寒そうにみえて缶コーヒーをわたす　髪をふって白と黒のコントラストのコートに両手をつっこむ

「桜をみにきて昏睡しそうになるくらい魅了される探究心はこの夜のむこう未知なる星へとむかっていくのね」

君はそういった　桜はたくさんの祈りにこたえている　神経を針のようにはりつめて生活している君は周囲からまたたくカメラのフラッシュに額の皺をよせた　花見客のあふれる人の群れのなか遠のいていく

桜の誘惑にひたっていたくてインスタントカメラをもっていた手をぬく　遠くなった君をみつめた　飴をうっている屋台のあかりの下　君は泣きたくなるくらいかなしそうにいこう　と口を変形させる　写真はいらない　メモリースティックも必要ない死を前にしてもあかるく前向きに生活をおくれる人たちをうらやましくおもうことにかわりない　前向きさなんて説明しえないもの　社会的な目線からみたら対照のようにふとおもわれてしまうかもしれない　しかし呪われた路はひきよせられていくもの　砂の上を水筒もなく歩き　うしろをみても前をみても横をみても空と砂しかないような路はこの街にあふれてい

る　砂丘に倒れていた君をみつけて肉体をかさねても二つの路にオアシスはうまれない

檸檬色のキャミソールをきた君は部屋の空気をいれかえてキャメルの葉先に火をつけたすっかり夜のあけた街に霊魂のような煙をはきかける

「あなたの盾となりたかった　過去からつきつけられるナイフから守るためにいついかなるときもうけとめていたかった」

青い光のこもる薩摩切子の底に日本酒をおとした君はすさむ気もちを落ちつかせるため睡眠薬を舌にのせアルコールとともに胃へおとした

雲に隠れようとする太陽を瞳にともす　君はクロスを額にもっていく

「薬にたよって狂気を封印していくつもりはないわ　もう一夜　もう一夜　と月の蘇生を祈ることくらいしか使命なんてないから」

棚にたててある赤いろうそくをみて蒔絵のネイルのついた爪をなめた

機械の谷に奈落の底のような朝は埃にまみれてふってきた　清涼な空気を裂く日光によって死にかられた脳みそはミキサーにかけられたようにスクリューされる　醜悪なこころは淫乱に処刑され光を拒否した

ゆれるカーテンのむこう外をみる　群れにならない鳥たちの滑稽な中傷にみおろされる美しい人たち　尻からコンセントをたらしターミナル駅へとのみこまれていく

時計をとめてくれ　海王の月に陶酔していたい　マイナスな方向に屈折したくない　もっとたくさん笑っていたかった　楽しい記憶ってあんまりうまくつかめなくて辛かったことや喧嘩したこと嫌われてしまったことそんな負の遺産によって今は苦痛にかわる

布団にはいった　あたたかい君の背中に鼻をよせて眠る　霜焼けしてしまったこころにいたいけな悪夢をみようとも明日なんてこさせてやるものか　両親と弟と友に囲まれ没薬の木に恋の実るフィルムのような路　将来は日本史の教師になってこの街に赴任してきれいなお嫁さんをもらいアットホームな家庭をもつ　つつましく栄養を与えた睡蓮のような花は魔物によって食い荒らされてしまった　もう起こりえない　残ったものはやさしさを求める報われない祈りのみ　月にいるお姫様にもわかるかな　こんなにもこころをやさしさにひたらせている気もち　おそらく月のお姫様も黒くそまった桜をみて泣いている